

平成26年7月18日

第73回 建設産業史研究会定例講演

『工手学校造家学科から工学院大学建築学部まで』

工学院大学

名誉教授 吉田 倬郎 氏

ご紹介をいただきました吉田でございます。もう1年ぐらいになりますが、室さんから「研究会があるから話をしてほしい」と言われました。「何の話が良いでしょうか」「建築学部のことを皆さん聞きたがっているようです」「建築学部のことを詳しく知りたければ、私よりも適任者がいますが」「いや、あなたの話を聞きたいんです」。そういうやり取りがあって今日ここに参ったしいです。

建築学部についても話題はあるのですが、工手学校のお話のあとにご紹介をさせていただくと、またいろいろと参考にさせていただけるのではないかと考えました。もう一つ、できたばかりの建築学部がどうなっているかについては、例えば審査を受けるために国にレポートを書いた先生のほうがはるかに内容に通じているのですが、その手前の段階で四苦八苦して建築学部の創設に努力したあたりの経緯については、いろいろな意味で私がジタバタして今に至っている部分もあるということです。そのようなことも含め、時間の許される中でお話を申し上げたいということでございます。どうぞよろしく願いいたします。

実は、この3月で定年退職をしました。大学に入学するために上京したのは昭和40年です。高知の田舎から出てきた高校の同級生が現在も東京にはずいぶんいるのですが、だいたい3年前とか5年前とか、もっと前に定年退職して好き放題をやっています。私が東京大学の助手や工学院大学の教職に就いた頃は、「いい仕事だねえ」と皆さん言ってくれました。会社で30歳前後というと、こき使われて、成果は上司が持っていき、ちっともいいことがないという時期だったと思います。ところが最近になりますと、皆さん60歳前後で辞めて、好きなことをやっている。羨ましいなと思っていたのですが、やっと私もこの3月で無事定年退職をして、今があるということでございます。

先日、名誉教授という称号をいただきましたが、これは黙っていてもいただけるわけではなく、審査があります。4月になりますと、学科のほうで「吉田某を名誉教授にしたい。資格もある」というような書類を作ります。大学全体のプロセスを経て、5月の末日ぐらいでしょうか、名誉教授の称号が出るのが確定したとの連絡が届きました。学長室にご挨拶に伺い、名誉教授の称号記という、卒業証書のようなものをいただきます。ところが、私と同じこの3月に辞めた立派な先生方の中には、何らかの事情で名誉教授に該当しないという判断をされた方もいらっしゃるもので、簡単にももらえるものでもないということを申し上げておきます。

スライド-2 まず、工手学校のご紹介をしたいと思います。明治になって、明治政府は富国強兵政策を一生懸命やりました。建築や建設の分野は、まさしく殖産興業に繋がっていました。当初は国が自ら殖産事業をやり始めたのですが、明治10年以降になると払い下げを始め、民間の企業が育っていきます。このあたりは、富岡製糸場のいろいろな話の中で言われていることです。学校に関しては、文部省が明治14年にできました。その前に「学制」の公布があって工学寮を設置し、それを工部大学校に改称したのが明治10年です。やがて「帝国大学令」が公布されて大学ができるわけですが、その間に東京職工学校ができます。いろいろな産業分野の先生を育てる学校の指導者の育成を目的とする、東京工業大学の前身となる公立の学校です。そういう中で、工手学校造家学科というのが明治20年にできます。私立の、建築も含む学校で、当時は、建築という用語はなく、代わりに造家が用いられていました。そういう全般的な日本の状況がありました。

スライド-3 先ほども述べましたが、工部大学校造家学科が明治10年にできます。第1期生の卒業が明治12年で、辰野金吾ほか、合わせて4名の大先輩が卒業されています。それから、東京職工学校が明治14年にできておりますが、実はこのときにできた学科は機械と化学で、建築はありませんでした。明治34年に学校の名称が「東京高等工業学校」に変わったときに建築科を新設しています。

工手学校は、造家学科を含めて全部で八つの学科がありました。そういう意味では帝国大学の建築学科(当時は造家学科)に次いで2番目に古い、造家学科のある学校になります。

東京美術学校(現東京芸大)ができたのは工手学校と同じ明治20年ですが、建築科ができたの

は昭和元年で、昭和になってからです。また、日本大学が日本大学高等工学校をお創りになったのが大正9年で、そこに土木と建築が入っている。それから、武蔵工業大学に建築工学科ができたのが昭和4年。工手学校はむしろ職人さんの現場隊長を育てるようなイメージの学校なので高等教育とっていいかどうか分かりませんが、一応、初等、中等教育を終わった人間が学ぶ学校に造家学科ができたということで、その中では非常に古い学校であることが改めて確認できました。

スライド-4 工手学校は、明治20年、築地に創設されます。校長が渡辺洪基。明治の偉人に加えられるような方で、東大の総長、あるいはできたばかりの東京府の知事なども務められたています。そして、造家学科にも、当時東大の先生をされていた辰野金吾、片山東熊、妻木頼黄、藤本寿吉など錚々たるメンバーが教員陣に入っていました。こういう先生方が夜間に授業をされており、実務教育の達者な教員も揃っていたようです。築地にあった校舎は明治29年に火災になってしまったのですが、校舎再建に際して御下賜金を賜っています。これは、非常に名誉な、ありがたいことであったということが、記録に残っております。大正12年の関東大震災で校舎が壊滅的な打撃を受け、淀橋に移転して仮校舎で教育を再開します。淀橋というのは新宿駅の西側のエリアで、今この地名はヨドバシカメラに残っております。それから、新宿校舎の向かいにあった淀橋第二小学校は、建て替えられ、きれいな新宿区の信託ビルに化けております。

スライド-5 これは築地の頃の地図です。工手学校の跡ですが、今残っているものでは本願寺があります。この地図をご覧になって、実はここには何々があったとか、そういうことを教えていただければありがたいと思います。こういうものがこのプレゼンテーションの準備をするときに見つかりまして、今ご紹介をさせていただいているということです。

スライド-6 「築地工手学校校舎1888年」とあるのは、木造3階建ての校舎です。なかなか立派な校舎のように見受けられます。こういう校舎が建っていました。

大正12年の関東大震災のあと淀橋に引っ越して、しばらくは間借りの仮校舎で授業をやっていたのですが、いつまでもそういうわけにはいかないということで、いろいろと募金活動などもやり、当時としては最新鋭のRC造3階建ての新校舎が落成します。これを期に、名前を工手学校から

「工学院」に変えております。**スライド-7**

この時期に卒業された方のお子さまと、たまたまお話しする機会がありました。長野県ご出身の方ですが、工手学校卒業後、県に戻られて、公職としては、最後は長野県の建築部長まで務められています。お子様は私よりちょっと年上の方ですが、「私の父親はまだ元気で、聞けば工手学校の卒業です」というようなお話でした。私は当時、教務部長をやっておりましたので、大学から発刊する本などにもぜひその方のお話を紹介したいと思って、松本に行ってまいりました。

面白いことが分かりました。その方が卒業したのはこの校舎ができて間もないころです。お会いした時は90歳を超えられたばかりの頃ですが、「私は工学院になって最初の卒業生です」と信じておられるのです。しかし、学校に戻って確かめると、卒業する学校は入学した学校だということなのです。だから、その方は工手学校の最後の卒業生です。そういうことが今の工学院大学の建築の学生にも当てはまります。後ほど改めてご紹介しますが、建築学部になったのは2011年ですが、その前に入学している学生は留年すればまだ4年生です。だから、その学生諸君は、卒業が5年目になっても6年目になっても工学部建築学科の卒業です。ストレートで上がってくる同じ年次の卒業生は建築学部の卒業生になります。そういうことなどを改めて確認できた次第です。

スライド-8 資料をめくっておりましたら、「工事中の校舎」という写真が見つかりました。鉄筋コンクリートの工事です。もう少し写真の精度がいいと異形鉄筋なのか丸鋼なのかが分かるのですが、何とも言えません。一応想像で申し上げますと、異形鉄筋は輸入物しかなく非常に高かったもので、四隅の柱の主筋ぐらいが異形鉄筋で、あとはみんな丸鋼というのがたぶん、その当時の鉄筋の様子ではないかと思われます。確かめたわけではありませんので、間違っていたらどうぞお許してください。

学校の経緯をもう少しご紹介します。

スライド-9 太平洋戦争が終わって戦後の日本が始まるわけですが、工学院大学も新制大学として昭和24年に発足します。先ほどご覧いただいた鉄筋コンクリート3階建ての校舎は、戦災の中で焼け残ってちゃんと使えるということで、当時、デパートではないかと思いますが、「買い取ってぜひ商売を始めたい。それが今の日本に非常に必要だ」という話があったようです。しかし、当

時の理事会は「やはり教育こそ大事だ」とし、売らずにここで学校教育を再開したという話がござい
ます。

それから、当時はまだ大学にはなっていないで、経営的にはなかなか苦しかったようです。ある
いは大学になっても将来が見通せないというようなことで、新制大学にするのに理事会は少し後ろ
向きだったようですが、若手の先生方とか学生の中の元気のいいグループが、「やはり大学にし
なきゃ」といっていろいろ運動をした結果、新制大学として昭和24年に発足することができたよう
です。ただ、しばらくは、学生の募集、その他状況が十分ではなく非常に苦しかったというように
もございますが、やがて経済成長にはいり、その中で発展をしていったということです。

昭和24年に発足した当時は、機械工学科と工業化学科の2学科の大学でした。そして1部ととも
に、夜間の2部を設けました。前身である工手学校の生徒さんの多くは、昼間は例えば内務省
の営繕とか立派な建設会社で、お役人さんや技術者として働いていました。あるいはもっといろ
ろな方がいらっやしたかもしれませんが、そういう方々のための夜間の教育をしておりました。そ
ういう伝統がありますので、工学院大学では2部というのは非常に重要な位置付けにあるので
す。こう言った背景を踏まえ、1部、2部を作ったということです。そして、昭和30年に電気工学科と建築
学科を新設しています。

こういう経緯からもある程度類推できるのですが、工学院大学は機械系の勢力が強い大学で
す。と言うとちょっと語弊がありますけれど、初代学長の野口先生は東大の機械の教授を務めら
れたあと工学院に来られた方ですし、今の学長も機械の先生で、工学院大学の学長はずっと機
械の先生が多いのです。ただ、後ほどご紹介申し上げますが、建築の伊藤鄭爾先生が学長のと
きに新築校舎を超高層に建て替えるという判断をされて、実施に至ったという重要な仕事をなさ
った建築の学長先生もいらっやいますが、だいたい機械系が強い大学です。

昭和30年以降になりますと、日本の経済も高度成長期に入って大学も大いに発展することにな
るわけですが、工学院大学の建築計も建築学科の中に学科に準ずるような扱いで「建築設備コー
スを作りました。当時、建築設備に力を入れている大学はそんなになかった中で、建築設備コー
スを出た卒業生がずいぶん建築設備関係の会社に行きました。あるいは建設会社にも建築設備部

門があります。最近でこそ建築系学科を設けている各大学の設備教育も充実していますので、だいぶ様子が変わってきています。しかし当時、建築の設備を学んだ学生を出しているのは工学院大学ぐらいしかなかったと言うと語弊がありますが、そのような中で設備のほうでは人をずいぶんたくさん出させていただいた時期がありました。

大学院の整備も私学としては早期に行っています。昭和39年に修士課程を作り、昭和41年には博士課程を作りました。私立の大学で博士課程をこの時期に作ったのは、あまり多くなかったようです。修士課程はあっても博士課程がない大学が多かったのですが、ここ10数年でしょうか、博士課程がずいぶん整備されてきたという感じがございます。ただ、博士課程があっても、実際に博士課程まで残って学位を取る学生がどれだけいたかという、必ずしも芳しい数ではありません。

少し横道にそれるのですが、大学を卒業して大学院に入り、そして、修士を修了したあとさらに博士課程に行くというのはなかなか難しい、ということがあります。そういうことができるのは、東京で言えば東京大学とか幾つかの限られた大学になってしまうような時期がありましたが、博士課程をどうやって活用するかということで、もう20年ぐらいになりますでしょうか、工学院大学では社会人特別選抜の博士課程というのを設けました。

それまでは、仕事をしている人が大学院に入るには、いったん休職して大学院に籍を置かないと具合が悪い制度でした。社会人特別選抜の博士課程の大学院というのは、応募者の現在の職場に研究環境がある程度整っていて、そこでの研究実績があるかどうかを一応審査させていただきます。そのうえで博士課程で学位論文を十分書いてもらえるだろうと判断させていただいた方には、今勤めているところを辞めることなく大学院に籍を置き、博士課程で論文の取りまとめや研究事をやっていただきます。そういう制度ができてからは、博士課程にも入ってくださる方が、ずいぶんと言うと大袈裟になりますが、ある程度数が入るようになり、私もかれこれ6人ほど博士論文をまとめるお手伝いをさせていただきました。

景気の動きの中で、学生もたくさんいる、人材ニーズも多いということを踏まえて、やはり学科を設けたいということがありました。その間に「コース」という、学科に準ずるような内部的なカリキュラムの仕掛けを設けたりはしてきたのですが、平成11年になって初めて学科を複数にしております。

す。このあたりの学科を複数にするのは、工学院大学よりもほかの工科系の学校のほうが手早く、上手にされていたという気がします。建築学科の中に二つのコースを設けたり、建築系の学科を複数にしたり、いろいろなことをジタバタとやってきた中で、やがて建築学部を作るに至った、というようなことを一応大きく取りまとめさせていただいておりますが、このあたりはいろいろなことがありましたので、後ほど改めてご紹介をしたいと思います。また、今日の参加者の方は、建築関係者が大方だと思いますので、施設整備についてもざっとご紹介したいと思います。

スライド-11 「昭和36年頃の新宿校舎」という写真があります。手前に昭和3年にできた校舎があります。向こうのほうにはまだ淀橋の浄水場が残っておりますが、道路の整備がだいぶ進んできており、新しい区画で整備された道路に向かって、当時、新館と呼んでいた校舎かできます。学生の定員もどんどん増やしてきた時期です。それから、大学の設置基準が整備され、八王子に八王子校舎を造っております。この設置基準には、学生数とかに対応した校地面積、校舎面積、各種スペースなどの基準が設けられています。分厚いドキュメントとしてまとめられているのですが、そのためには手狭な新宿だけではとても設置基準に合わないことから、八王子にグラウンドのある広いキャンパスを手当てをして各種の施設を設けたということです。

今、八王子には23の大学があって、「学園都市八王子」という記事も時々、新聞その他で見掛けますが、実は工学院大学が八王子にキャンパスを設けた最初の大学です。だから、学園都市八王子として大学がずらずらとありますが、一番上に工学院大学が載ります。ところが、費用のことが関係したのかどうか分かりませんが、非常に交通の便の悪い校地で、最寄りの駅からバスで、以前ですとラッシュのときには30分も40分も掛かるようなことがありました。歩くところ1時間ぐらいですが、なかなか歩けないということです。もう少し鉄道の便のいいところを選べなかったのか、などと、あとから工学院大学にお世話になった者としてはそのように思うのですが、まあ、致し方ないことですね。

スライド-10 八王子キャンパスには、校舎を次々に整備しています。ざっと全体の流れをご紹介しますと、3号館という建築の入っている建物が昭和60年にできます。そして、昭和61年には八王子校舎5～11号館が落成します。これは新宿の再開発と大変関係の深い事業です。新宿校舎

は西新宿の一等地で、実は危険物とか廃棄物処理の必要なものを出す、新しく造ると絶対許可にならないような化学の実験や電気の実験をやっていました。しかし、これから新築される建物ではそうはいかないです。これに代わる実験施設を整備しなければいけない、ということで、かなり頑張って八王子校舎の5号館から11号館を造ったのです。

この5号館から11号館の現場の所長さんが、今、清水建設の社長さんです。八王子の建築学科で私も授業をやっており、当時、所長さんにご無理をお願いして、毎週1回昼休みに30人ずつですか、半期の授業の一環として、で学生を分けて現場見をさせていただきました。早めの学生は土工事しか分からないのですが、何しろ現場の雰囲気を経験させたいということで、私も毎週、昼休みをつぶして現場を見ました。いろいろご心配、ご無理をお掛けしたなあと、今、改めて思ったりする次第です。

平成元年に新宿校舎の高層棟ができます。そして八王子校舎には総合工学研究棟も造りました。超高層の校舎というのは、日本最初です。その後、例えば明治大学や法政大学が超高層の校舎を造られています、とりあえず今建っている中では、どうやら工学院大学の校舎が一番高いようです。というか、敷地に余裕がないものですから、高くせざるを得なかったという面もあります。たぶん、学校の施設として超高層というのは、あまり適性がないのではないかと、改めて思うわけですが、それでも新宿で再開発をして大学を続けるとすれば、ああいう形の校舎しか造れなかったということです。

超高層の横に8階建ての中層棟も造り、あるいは広場を造っております。それから、八王子校舎には15号館という建物を造り、地震防災・環境研究センターも造りました。そしてつい先日、125周年記念総合教育棟が竣工しておりますが、そのあたりの写真も幾つかご紹介いたします。

スライド-11 「昭和36年頃の新宿校舎」。これは先ほどご覧いただいたものです。

スライド-12 「新宿校地再開発第1期工事開始 昭和63年」。**スライド-14** これが図面です。京王プラザホテルがあり、こちらに郵便局があります。図の上にはセンタービルがあつて、下にはもともと淀橋第二小学校があつたのですが、今は新宿区の信託ビルに化けております。大学が使っている建物は高層棟と中層棟で、ここにアトリウムがあります。ちょうど街区全体を田の字に分

けて、左二つを大学で使っています。右二つは貸しビルと公開空地の広場です。もともとこのブロックの78%が工学院大学の所有地で、その土地の中で学校法人の単独事業でどういう建て替えができるかということを検討した時期もあったようです。私も細かなことを承知するような立場でもなかったのですが、結果的にこうなったということを知りただけですが、全体を特定街区として計画をなささいという国が都かの指導をいただく中で、それが一番良さそうだということになったようです。

残りの20%少々の地権者が第一生命さんと日本生命さんの保険会社で、特定街区としてそことの共同事業になりました。学校法人工学院大学にはほとんど資金がなかったものですから、計画された建物に底地のプロポーシオンと同じような権利があるとすれば、当時、空中権と言っていたものですが、貸しビルのフロアの権利を譲渡する中で建設費用を賄うことができましたようです。お金のやり取りがない形で、何か合理的にそういうことができるようになったという話を聞いております。すっかり貸しビルの権利がなくなったわけではなくて、結果的には貸しビルの部分の17%が学校法人の権利として残っており、それで奨学金などを賄うようなことが何とかできています。

スライド-12 1期工事が街区全体の4分の1の部分で実施されました。いったん全体を更地にして建てたほうが工事的には非常に効率がいいわけですが、その間、学校ができません。それはまかりならんという文部科学省の指導で、建て替えの途中もずっと教育・研究は続けることになりました。昭和3年にできた休刊は、その上に増築して、当時は5階建てになっていました。知らないとき止まりになる迷路のような校舎になってしまっていたのですが、新館と呼んでいた建物は全体を残し、旧館については一部を壊し、この時期のために若干増築し、ずっと教育・研究を続けながら高層棟を建てたわけです。この時期、私の研究室は増築されたこの建物の3階にありました。非常にいいところでした。不便なところなので誰も来ません。便利な場所の研究室だと、便利なのはいいのですが、しょっちゅう人が通って鬱陶しい。そういうことがなくて、今から思えば良かったなあというふうな思い出がございます。

スライド-13 「工学院大学新宿校舎」とあるのは高層棟の工事中です。床面積のわりには階数が多くて、エレベーターの効率などもちょっと悪いのですが、それでも何とかこういうものにするのだということで始めたわけです。基準階平面の両側に、エレベーター、その他があるコアがあ

ります。当時、精度のいい種類の鋼材が開発され、大スパンの梁などに用いられるH型鋼に効果的に適用されるとのことで、それを利用した最初に近いビルとして、いろいろな雑誌にも紹介していただいたのがこの鉄骨です。それから、私は設備の専門ではないので詳しいことは分かりませんが、ウォールスルーの個別空調というのは高層になるとどうやら効率が悪いということです。高層部にある研究室の空調などはウォールスルーとセントラルを併用していましたが、デザインなどでは話題になりにくい建物でしたが、当時、日本ではウォールスルーの空調を使った最も高い建物でしたから、技術的には少しは新しいチャレンジもあった建物です。

スライド-15 今はこういう新宿校舎です。大学が使っている建物と貸しビルのツインタワーの街区になっています。西新宿の超高層街にはサインの規制があります。ここに書いてある「工学院大学」も、最初はちょっと具合が悪いというご指導があり、足元に小さな表札のようなものしかなかった時期があるのですが、やはり何とかしたいということで、いつの間にか建物の一番上に「工学院大学」のサインが付けられたということがございます。

スライド-16 「現在の西新宿」とあるのは、新宿校舎を含む西新宿の遠景で、写真の一番上に富士山が見え、下のほうに西新宿の建物群が見えます。今あちこちでユニークな形の超高層が多い中で、西新宿は日本で最初にできた超高層街ですが、一方では非常に新しいデザインの超高層もでき、コクーンタワーも見えます。工学院大学は、麒麟の群れの中の子どもの麒麟という感じで建っているように思われます。

スライド-17 「昭和38年(開学)当時の八王子キャンパス」。昭和38年に八王子校舎が開設されました。1、2年生教育を八王子でやるということですが、当初は、1号館の建物だけで事務と教育をやっていました。

スライド-18 「現在(2012年12月撮影)の八王子キャンパス」。比較的最近のものです。一昨年行われた125周年の記念事業で総合教育棟を造りました。私は、たまたまそのとき担当の常務理事として設計者の選定や施工者の選定を行いました。私みたいな者によくできたと思うほど、研究・教育とはかなり様相の違う決断をさせていただきました。設計をしていただいたのは、東京大学の千葉学先生です。この建物は最近、村野賞をいただきました。ほかにもいろいろ面白い建

物があるのですが、この教室棟とスチューデントセンターは建築学会の『作品選集』に選んでいただきました。全体としては地味なデザインの建物ばかりでしたが、八王子校舎にも少しは建築関係者に注目してもらえるような建物が近年やっとでき始めたのかなと思っていますところす。

最初にできた、当時からある建物の1号館は、ずっと残っていたのですが、総合教育棟ができて、今、解体をしているところす。先日見たところ、上はもうすっかりなくなって平らになっていました。ここで学んだその頃の学生さんからすると、非常にさびしいことかもしれません。それと、先ほど申し上げた5号館から11号館ですが、八王子キャンパス開設当時は丘の上には施設は何もなくて、グラウンドだけあった。そこに、こういう立派な実験施設ができたわけす。

スライド-19 二つのキャンパスをつないで何とか研究・教育をやるのだ、ということでやっているわけす、それもなかなか大変す。何が大変かという、私も後期に毎週1回、2年生の必修科目を教えに行っていたのですが、やはりアクセスが不便なのです。それを何とか克服したい、ということで理事会と大学がそれなりに決断し、中央高速を使って、新宿校舎と八王子校舎とを直接つなぐバスを走らせることにしました。料金も比較的格安にしました。ただし、大学が若干持ち出しになります。学生募集その他で各大学とも苦労するご時世なのす、学校法人としては思い切った決断をしました。こういうことをやったおかげで、例えば、千葉からは新宿校舎までは来ても八王子校舎になかなか行けないということがあったのですが、千葉県の学生さんが少し増え、それなりに効果があったようす。

これからいろいろと検証しなければいけないことなのす、新宿校舎を再開発したときには、新宿は手狭だからどこかに集結しようやという話もありましたし、新宿校舎と八王子校舎の複眼構想とか、いろいろと検討を重ねてきました。経済的なこと、その他を考えるとなかなか難しいこともあるのですが、今後に備えるような形が少しずつはできているのではないかということす。

スライド-20 そういう中で、建築学部を作るということにつながる議論は、実はずいぶん前からあると言えばあったのです。「工学部建築」ではなくて、エンジニアリングは別の学科でやるという、欧米にあるような建築学部がいいという議論をロマンティックにされる先生もいらっしゃる。そういう議論も含めて、将来、建築をどういうふうに持っていくかという議論は私どもの大学でも常にあった

し、いろいろな大学の年の近い先生方と話をすると、そういう議論はどこかの大学の建築でもあるようです。建築の先生というのは、そもそもそういう議論が好きなのだと思います。そういうことはあったのですが、じゃ具体的にどうするというふうなことにはなかなか進みませんでした。

私は平成14年に学科主任になっています。当時、工学院大学はデザイン学科ができて学科は二つあるので、主任を二人出すのですが、運営は1本でやっていました。教室会議も常に一緒にやって、先生方のいろいろなことも混ぜてやるというようなことだった。任期は2年で、1年目は見習い主任です。2年目は第1主任というふうな俗な言い方をしていたのですが、見習い主任のうちにと、若手・中堅の先生方を集めて「建築学科将来構想検討WG」というのを作り、いろいろな検討をしていました。

そういう中で、私が主任の2年目になるべきときに、やはり東大の機械の教授を定年退職されて後工学院大学に来られた三浦先生が学長になられ、工学院大学を何とか複数学部にしたいと言って、21世紀になったばかりのこの時期に「21世紀プラン作成委員会」というのを作りました。副学長の木村先生がまとめ役でした。そのときに私は、次年度は第1主任に就かなければならないなどと言いながら最初は生返事をしていたのですが、そうもいかないという中で学長補佐になり、「21世紀プラン作成委員会」のメンバーにもなりました。学科主任の兼務はできないので、学科の中での建築学科の将来構想の検討は、別の人に旗振り役をお願いすることになったわけです。

スライド-21 「21世紀プラン作成委員会」が全学的にできた中で、建築が一足早くこういう作業に手を付けていたことは非常にタイムリーで良かったと、当時は思いました。学部を作る、学科を作る、再編をするというのは、結構ややこしい、あるいはなかなか思うようにいかないことがあります。ざっとご紹介をしますと、まず、当該学科にそういう気運がないとなかなかうまくいきません。当該学科がなくて全く新設の学科を作るときには、それなりに人を集めてというようなことがあるわけですが、建築学部だけのことを言えば、やはり建築の中で議論がまとまらないといけない。建築学部ができるといいとか、そういうレベルの話には賛成でも、じゃ、どういう建築学部なのかという、皆さんいろいろなご意見があります。いちいちご紹介できませんが、そういうことがありますので、三浦新学長が「21世紀プラン作成委員会」を立ち上げたとき、1年早めに学科としてそういう

検討を始めていたことは、21世紀プランにつながる作業として、少なくとも「21世紀プラン」のレポートの中身が充実しているという点では、非常に役に立ったということです。

そして、当然ながら大学レベルでの合意が必要です。工学院大学は今でも工科系の大学です。ありますし、当時は工科系の単科大学で、学科の数はそれなりに多くなっていましたが、大きな系列としては、機械系、化学系、電気系というのが建築系のほかにありました。今でも4系列という言い方があるのですが、建築以外の先生方に、「なるほど、それはいいね。」と思ってもらわないといけない。そういう意味では、議論がどこからともなく起きて進むというのではなく、新学長になって「21世紀プラン作成委員会」が作られ、全学的に検討する形が整ったのですが、それも良かったのではないかと思います。ただ、建築ではいいと思っても、機械、化学、電気の先生に「ああ、それはいいね」と言ってもらうのがなかなか骨で、大変だったと言えば大変でした。それでも何とか「21世紀プラン」のレポートができたのですが、理事会がそのあとに控えていて、理事会の決済がないと学校法人として決定したことにならないということがございます。

もう一つ、国はどういう関わりをするのかというと、当然、国が認可をしなければ認められません。以前は、かなり事細かな報告書を作って、担当官に直接見ていただいてご指導を受けて、というようなことをやらなければいけない時期がありました。それも大変だということから、本来の審査とは別に、届け出で認められるルートができました。再編される学部学科の内容が大幅に変化していない、定員が既存の定員の枠内にある場合ですと、当然ご指導もいろいろいただくわけですが、それでも担当部局とのやり取りの範囲で認められるというルートです。やはり届け出で認められる範囲でないと、時間がいくらあっても足りないということになりますので、そういうことを考えて届け出の範囲でやろうということにしました。しかし、それでは主旨に合わない、大きくとは言えなくてもある程度内容を変えたいとなると、国が作る審査委員会の審査に対応しなければいけません。これは時間やエネルギーがかなり掛かることから、工学院大学としては、届け出の範囲でできることをやろうと考えてやってきたということです。

スライド-22 「21世紀プラン作成委員会」のレポートの中で、当然、建築系学部に関する部分があります。その主要な部分の抜粋を何項目かにまとめて紹介してございます。

「1. 建築系学部設置の背景と教育目標」では、まず、「わが国の社会・経済の成熟化による、いわゆる新築需要を対象とした20世紀型建築市場、建築産業の縮小」とあります。今、日本では建築ストックへの対応関心が寄せられていますが、そういうことをこの時点で言っています。当時、建築学会でも、新しい建築産業と建築市場を検討するような委員会が並行してあったと思います。工学院大学の建築系の20世紀型建築学の教育体系では、どうやらこれからの建築市場が求めるマンパワーとミスマッチである。それを解消するために、工学部の中の建築から一歩抜け出て、建築学部の設置が必要である、という認識をするに至ったということです。また、新たに形成されつつある建築関連諸分野では、いろいろな知識、技術、能力が求められるわけで、工学部建築学科の枠を大きく超えた多様な人材を出したいといったことをうたったのです。これは、いろいろなところでよく言われていることを工学院大学の建築なりにまとめてみたということかもしれません。

次に非常に問題になったのが「2. 学部の名称」です。「建築学部」というオーソドックスな名称に落ち着いたのですが、新基軸を出したいということで、「環境学部」とか「環境・建築学部」とか、あるいは、技術的な内容もちろんあるが名前には「デザイン」を入れようとか、いろいろな話がありました。例えばこういう議論です。建築を出発点にして環境のことも含んだ内容も扱う、ますます広がった内容の学部にするために、「建築・環境学部」という名前を付けたいという考え方も有力でした。建築と環境が和集合になった形で内容が広がり、発展でき、受験者層もますます広がるというのですが、そういう話を受験産業のコンサルに持っていきましたら、受験者は重なった部分でしか見ないから、建築を狙っていたある部分が逃げてしまうという議論などがありました。和集合ではなく積集合になるということです。それは実際にやってみなければ分からない話なので何とも言えなかったのですが、最終的にはやはりオーソドックスな「建築学部」で行こうという決断をしました。

スライド-23 「3. 学部の体制」。これもいろいろな話がありました。具体的に検討した課題の一つは、工学部の枠を超えて文系的な要素も教育内容に入れるということですが、学生が建築学部を卒業するということは、やはり建築士の受験資格を満足するようなカリキュラムでないとなじまないかと判断し、そういうことをきちっと位置付けたということです。

具体的な問題の一つが教員です。やはり先生がいて、研究室があってということなのですが、

そのあたりをどうするかというのはなかなか難しかったし、やってみなければ分からないことがありながらも、具体的にこうするのだということを書かなければいけない。そういうことで、「工学部建築」に対応するような部分が3分の2ぐらい、新分野が3分の1ぐらいのバランスを考えました。新規分野とはどういうものかなかなかディテールが決まっていない時期に、それなりのことを書かないといけないということで、報告書を書いております。そして、工学部の中ではできない、建築学部にするのだ、という理由についてもきちんとまとめておきたいということで、「①現代の建築に対する高度化・複雑化したニーズは、工学部ソリューションのみでは対応できない。総合的な『建築学』としての枠組みが求められる」「②建築産業の周辺分野には、建築の基礎的素養（一級建築士受験資格程度）を満足すれば、必ずしも工学的教育の習得を必須としない職能、人材が活躍可能な領域がある。この領域は他分野出身者との競合関係にあるが、卒業生が競争優位に立つ能力付与、教育コンテンツの提供が必須である」「③入試状況を改善するために、本格的に建築を学びたくとも工学部的な教育の枠組みに気後れしている、文系受験者の中の潜在的志願者を取り込む」というようなものを用意したということです。

「総合的な建築」と言っています。工学部の枠を超えた教育をしたい。そして、建築産業そのものの中核となる分野として当然あるわけですが、その周辺にも目を向け、そこにも人を出したい。また、建築の周辺分野といっても、日本の場合は建築士という資格が特に重要ですから、やはり建築士の資格を生かしつつ周辺に広がっていく、ということをしっかり考えようということです。これは、人材をどこに出すかということでもあります。教育が①。人材をどういうふうに出すかが②。そして③が受験生の確保。まず、受験生が増えない、あるいは確保できなければどうにもなりません。

今日は立ち入った話は省略しますが、大学の場合、18歳人口というのが一つのバロメーターになります。最近で一番多かったのは1990年と91年でしょうか、2年間に限って200万を超えていました。その前は昭和22、23、24年生まれのいわゆるベビーブームで、年間240～250万人生まれました。この中にはベビーブームに生まれた方も少しいらっしゃるかもしれません。現在は少子化が進んで第3次ベビーブームが来ないです。今18歳が130万人を切って120数万人ぐらいでしょうか、そういう中で勝負をしなければいけないので、非常につらいわけです。言ってみれば、高等教育と

というのは構造不況業種かもしれません。

話を入試に戻しますと、工学部であるからには、入学試験の受験科目に理科、数学は外せないです。だから、建築の勉強、あるいは建築をやりたいという人間は、日本の場合、多くは理工的なタイプが多いわけです。一方で、高校の時に文系クラスに入っているいろいろな勉強していると、建築というのは面白そうだ、絵空事ではなくて実感がある、しかも、技術がどうだというよりも建物をどうやって使うとか、非常に文系的な資質の生きる分野がたくさんある、ということに気づく子がいます。しかしながら、面白いと思っても、文系クラスに入っていると工学部の試験が受けられないし、進路の先生に相談すると、「無理だからやめておけ」と言われるようです。だけど、そういう子も建築を学びたいという気持ちがあれば十分やっていけるはずですよ。そういう打ち出し方をしたいというのが③に書いてあることです。

スライド-24 どういう教え方をするのかということです。このときのレポートでは、1、2年で必要なことをやり、3、4年で幅の広い専門教育をやるということを書きました。**スライド-25** もう少し具体的なイメージですが、学科にすると学科の枠にとらわれてなかなかうまくいかないから、1学部1学科的な大学科にし、中にいろいろなプログラムを作って自由に選ばせ、選び方などはきちんと指導する、というようなことを考えながら、一級建築士の対応に必要な科目は1、2年である程度充足できるようにし、専門的なプログラムをいろいろ作ることを考えました。本来の建築的なプログラムもたくさんありますが、周辺分野として当時考えたのは、ビジネスプログラムとかインテリアプログラムです。設計の先生でインテリアに達者な方がインテリアを教えるのではなくて、2011年に建築学部にしたときには、建築は自らはやらないインテリアの専門家に来ていただいたりしました。少なくともそういう先生に来ていただけるような中身にしなければいけないということで、こんなことを考えたということです。

スライド-26 「21世紀プラン」を踏まえ、複数学部化を工学院大学はやりました。そして「21世紀プラン作成委員会」報告書で複数学部化の候補として挙げたのが、当時流行っていた情報学部、建築学部、そして国際化の時代をにらんでのグローバル・エンジニアリング学部でした。当時の理事長はこちらの分野に非常に意欲のある理事長でした。「21世紀プラン」のレポートの中で新

しい学部の候補としてこの三つを挙げ、建築学部は情報学部とともに有力候補ということもちゃんとレポートに書いてありました。ところが理事会は、情報学部とグローバル・エンジニアリング学部の二つを複数学部化の新設学部に位置付け、建築学部はもう少し先送りだという判断をされました。私としては非常に不本意な思いを強く持った出来事であったわけです。

スライド-27 その直後は、さすがに落ち込んだ状態でしたが、やがて建築学部の設立に向けて、中身について検討をやりなおし始めました。「今年だめなら来年」というのはなじみません。絶対こうでなければいけないということではないのですが、大きな再編をやるときには、大学というのは学生にとって1年から4年までの4年間というのが一つのまとまった単位となる期間になりますから、4年経ってどうだというふうなことを踏まえ、じゃどうしようというような検討をやっていると思います。少なくとも工学院大学ではそういう雰囲気があります。せっかく建築学部挑戦したのに、放っておくのは悔しい。何とかしようというふうなことで再挑戦をしたということです。

2011年に建築学部ができます。2011年に建築学部ができるということは、届け出の範囲で審査をしていただき、学部を作ってもいいよという内諾のようなものは、遅くも「前々年度末」に頂く必要があります。なぜそうかという、受験生への働き掛けは受験の前の年の5月とか6月ぐらいから始まるからです。受験情報が出回るとか、いろいろなことがあるので、それに先立って認めていただくことを早くやらなければいけない。だから、のんびりもしていられなかったわけです。建築学部化については、先ほど紹介したようなことで、検討の蓄積はかなりありました。しかし、そのままというわけにもいかないと考え、新基軸を取り込んでいくこととしました。

もう一つの大きな問題は日本の建築界です。今は表面的には非常に仕事が多く、景気がいい時期に入っているわけですが、当時は非常に厳しい状況にありました。姉齒問題のあと建築基準法その他が厳しくなりました。リーマン・ショックのおかげで世の中の経済が極端に冷えこんでいました。そういう非常に厳しい状況でした。「そういう中で建築学部を作るのは勇気が要るねえ」という話を他大学の先生から、忠告というわけでもないですけど、いただくようなこともありながら、検討を始めるということであったわけです。

スライド-28 再挑戦の段階でもう1回問題意識を整理しております。「建築学部構想の問題意

識」は、建築学科の中で作ったドキュメントを私なりにまとめたものです。

「育成する人材の多様化」「建築の供給者の視点に消費者の視点を加える」。これまでの工学部建築というのは、どうしてもモノを作ることに意識が向いたわけですが、それに消費者の視点を加えるということをぜひ入れたいと考えました。このことは人材をどう出すのかということにもつながります。

「受験者層の多様化」。文系受験者にもある程度、入試の入口を開放したいということです。

「教員組織のスケールメリットの活用」。建築全体のことを言えば、工学院大学は当時、工学部の中に建築学科と建築都市デザイン学科の2学科があり、学生定員が合計で270名だったでしょうか。そして1部とは別に2部があって、すでに定員の削減を始めていたのかもしれませんが、100人ぐらいの定員だったと思います。工学院大学の場合、学科再編や学部化などは、議論については、建築系は一つですから、その中で議論をすればどうにでもなるのですが、例えば日大さんの場合は理工工学部に建築学科と海洋建築学科があり、生産工学部に建築工学科があり、郡山の工学部にも建築学科があり、その全部を集めれば、数の上では工学院大学よりもはるかに大きいのです。実際に日大出身の建築関係者は、いろいろところで活躍されています。そのような話を建築学会の元会長であった日大の先生に申しあげたところ、「吉田さんね、建築は確かにオール日大だと強いかもしれないけども、大学の中で学科再編などの議論を始めようとする、横の連携の話はともかく、まず学部の組織というのが非常に強いんです。それを外して横につながるというのはとてもできないことですよ。」と伺って、「ああ、そういうことがあるんだな」と思ったことがあります。教員組織として、一つのまとまった組織を見ると、工学院大学もそれなりの規模なのかな、と改めて認識したわけです。

「教育制度改革への対応」は、いろいろと話題になりました。その中の分かりやすいテーマを幾つか挙げております。学部・大学院の一貫教育は、形式的にはそうはいかないのですが、実質的に、例えば早稲田大学さんなどはそういうふうなことをやっています。あるいは、東京電機大学さんも、どうもそういうふうに見えるようなカリキュラムを上手に運営されています。国際化、UIA、JABEEへの対応もあります。UIAというのは建築関係者の国際組織ですが、そういうところで建築

家の資格の議論があるので、そういうものに対応したいというテーマです。また、プロの技術者の認定をする動きが国際的にあります。日本でも、JABEEというものが行われ始めており、工学院大学でも機械系の学科はその認定を受けていますが、建築もこういうことへ対応する検討もしなければいけないということです。

「建設業界の活性化への貢献」。今は景気も表面的には上を向いているようですが、検討していた当時は非常に冷めた建築業界であったわけです。工学院大学は地味な工科系の学校ですが、頑張って建築学部化に取り組むのだというようなことをやれば、建築界にとっても明るい話題になるのではないか、という議論も少ししていた次第です。

スライド-29 建築学部の対象領域をどう捉えるかということです。「建築学部の対象領域の考え方」は当時の資料ですが、従来の工学部建築系学科に対して、ハード、ソフト、そしてスケールの大小という、4方向に拡大をしたいということです。特にソフトでは、生活とか、使い方、マネジメントということになるかと思います。スケールとしては、都市とか、ランドスケープとか、そういう分野ともより積極的に取り組むことを考えて書いた図です。

スライド-30 それから、カリキュラムの構成です。「建築学部のカリキュラム構成」は、まず、建築の基礎として、具体的には建築士受験の資格に必要なものの方をできるだけ1、2年のうちに取ってもらいます。そのために、それらを三つの学科に共通する科目として用意しています。それから、これまでの工学院大学もそうだったのですが、多くの大学で、語学や一般教養は1、2年にたくさん入っています。だから、せっかく専門の勉強をしたいのに、1、2年では語学や法学などをたくさんやらなければならないのです。建築はそれを逆手にとってというわけでもないのですが、建築を構成する専門分野によっては、社会学的なもの、心理学的なものが重要な位置にあるものもありますし、あるいはデザインの分野ですと美学とかも重要ですので、一般教養や語学などは3、4年でも普通に取れるようにして、1、2年のときのウエートを少し小さくしています。大学設置基準の大綱化で、設置基準上は「一般教養」はなくてもいいし、「一般教養」が明確に位置づけられたカリキュラムの構成を見せなくても良いことになっています。でも、工学院大学も含めて比較的古い大学ですと、一般教養というのはそれなりに重要だとしています。文部科学省などもそういうことに配

慮し、大学のリベラルアーツ教育というのでしょうか、そういうことにも力を入れないと偏った人格者が出てくるというふうな話もされています。

それやこれやの議論の中で、1年から4年まで一般教養的な部分もカリキュラムの重要な一部として位置付けています。さまざまな検討過程で一般教養の先生方にもご理解をいただいて、こういう概念を作ったということです。

スライド-31 資格対応としてはこのような説明ができるのではないかと思います。

一つの具体的な特徴を申し上げますと、「21世紀プラン」では、学科をやめてプログラムをいっぱい用意し、それからいろいろと選んでもらおうと考えたのですが、全学的な理解を得ようとする、議論はしてもちっとも分かってくれない状況が続きました。そういう類のことなんですね。

スライド-32 だから、2011年に発足したときには、一応三つの学科は作りましたが、新生は、学科に入るというよりは建築学部に入ってもらって、入学してから1、2年はしっかり建築の基礎を勉強し、自分なりにある程度のこと分かってから学科を決めてもらうようにしたわけです。しかし一方で、建築学部に入ってどの学科がいいか分からないというよりは、入学のときに、「私はデザインをやりたい」「私はまちづくりをやりたい」という子がいれば、それはそれで学科対応で入ることができるようにもしました。

それともう一つは、工学院大学には付属高校があり、推薦である程度の数が入ってきます。それから、全国の高校の中で程良い高校については指定校として指定させていただき、そこからの推薦が来ます。そういう入り方の諸君は学科ではなくて学部に入ってください。というようなことで、学科に入る子と学部に入る子と両方います。とはいえ、そういう入り方の区別は実質的にはほとんど意味がないというか、入学後の勉学の制約にはなりません。つまり、3年になるときは、学部に入った子は必ず学科を選ばなければいけないのですが、一方、あらかじめ学科に入っている子もこの時点で仕切り直しをして、よその学科を希望すればだいたい移れるようにしています。学科というのは形のうえではありますが、学生から見れば、その運用はかなりフレキシブルなものにしてあります。

スライド-33 学科ですが、せっかく学部にするのだったら三つの学科にしたいということが、全

学レベルで要請されました。一つは建築学科、二つ目は建築デザイン学科まではよかったのです。もう一つが、結果的にはまちづくり学科に落ち着きましたが、環境学科とか、住居学科とか、あるいはマネジメント学科とか、いろいろな候補がありました。しかし、いずれも帯に短し襷に長しというか、決め手が見つからない状態でした。しかも、それぞれの名前はいいのですが、一方でそういう名前を付けてしまうと、それに馴染まない分野がはみ出てしまいます。そういう中で、結果的に「まちづくり学科」に落ち着かせたわけです。

まちづくり学科と言いながら、その中には環境や安全・安心も入っています。防災というのは、後ほどちょっとご紹介しますが、工学院大学は西新宿にあって、大地震のときの大量帰宅困難者への対応だとか、いろいろなことで実験や調査をやってご評価をいただいている面もありますので、それはぜひまちづくり学科の一つの看板にしたいということです。あとは、当然、建築家の先生の中にもランドスケープにも関心があっていい仕事をしている方がいらっしゃいますが、ランドスケープを表看板の一つにした側面として、建築の先生ではなく、農学部出のランドスケープの先生に思い切って二人来ていただいたとか、建築出ではないインテリアの専門の方に来ていただいたとか、そんなことをやりながら新しい陣容を整えつつあります。

スライド-34 「カリキュラムの枠組み」。これまでも話をさせていただいたことですが、1、2年で建築学部共通の科目をやり、学科に分かれるときには、大きく、まちづくり学科ではこういうこと、建築学科ではこういうこと、建築デザイン学科ではこういうことをやるのですよ、という見せ方をしています。

スライド-35 「取得できる資格」にありますように、いろいろな資格が取れることを、それなりにうたっています。その中で一つ特徴のあるのが、社会貢献活動支援士です。西新宿の震災時の大量帰宅困難者対応云々ということも含め、都や区とも協力体制を作っているいろいろなことをやっているわけです。また、これに関わっている先生方が中心になって、こういうことに関し積極的にいろいろなことをやっている大学が全国に幾つかありますが、それらの大学の先生方と連携して社会貢献学会というものを作っています。そして、社会貢献士という資格がありますので、そのための教育プログラムを用意しております。

スライド-36 「建築系一般入試志願者の推移」。2011年に建築学部ができたのですが、当初一番気掛かりであった受験生は、おかげさまで倍増です。2年目は揺り戻しがあるかと思っただけですが、少し伸びました。次は少し減ったものの、この春はまた増えました。とりあえずほっとした状態で、私は大学を卒業させていただいて、幸せだったと思います。ただ、とりあえずこれはこれでいいのですが、今年良ければ来年どうだというのは、必ず出てくる話題です。入る学生の数は、定員プラス若干名の $100+\alpha\%$ なのですが、そういう学生諸君をどうやって卒業させるのか、どういうところに就職するのかというのが、今、大きな課題です。最初の建築学部の学生が、来春卒業します。もう就職戦線の山が過ぎて、それなりに決まっているわけですが、とりあえずは順調な出足になったのではないかと考えているところです。

スライド-37 いつ頃からでしょうか、一級建築士合格者の出身大学の情報が公開されるようになり、工学院大学は、昨年度は100名を超えて全国3位になりました。上は日大さんと東京理科大さんでした、合格者数が3ケタになって3位というのは空前絶後で、こんなことは二度とないのではないかと思います。去年ですからまだ情報の鮮度が残っていますが、こういうのが大学のホームページに載っていて、見ていただくのは、ちょっと気恥ずかしい感じがします。ふだん私の大学はだいたい5~6位で、数のうえでは早稲田大学さん、芝浦工大さん、近畿大学さん、明治大学さんなどと肩をならべて上がったり下がったりというところです。今の受験生のある部分は、卒業後どうなる、資格がどうだということに目ざとい子もいるので、こういう見せ方ができるというのはありがたいと思っています。

スライド-38 それから、国際化時代にどうやって対応するかということです。工学院大学の学生について私がこれまで感じてきた大雑把な雰囲気可言えれば、数学や理科、あるいは建築ですからデザインには関心があっても、語学はさっぱりだめだという子が大多数の大学だったのです。でも、そうではなくて、そういう学生諸君を国際化時代にどうやって対応させようかということで、「日本初のハイブリッド留学」と書いてありますが、こういうことを始めました。本来の留学は、向こうの学校に籍を置き、それなりのコースに入って何かを身に付けるということなのですが、ハイブリッド留学というのは、工学院大学の授業の場を外国に移し、先生方も交代で面倒を見、そして向こうの学

校については、語学の先生にはちょっとお手伝いをいただくようにしています。だから、英語は特にできなくても十分やっつけられる半年のコースです。

私が学生の頃と違って、今は、大学設置基準その他で卒業の条件が非常に緩くなっています。卒論を含めて卒業に必要な総単位数は124単位という時代ですから、真面目な子は3年の前期で、あとは卒論だけというぐらい単位が取れてしまいます。おそらくここにいらっしゃる方々は、1年で50単位、2年のときには100単位近い単位を取って学生時代を過ごされたのではないかと思います。当時は卒業単位が140～150単位だったのでしょうか。今はずいぶん少なくなっています。そういうこともあってこういうことができるわけです。それを「ハイブリッド留学」という名前で、一応全学的な制度としてやったのですが、最初の年は希望者が建築の学生のむでした。それでも、ロンドンの南の田舎町の学校に行って、まあまあ行って良かったということで、いつの間にか工学院大学の一つの看板にもなったような感じがしております。いわゆる留学かという、そうでもなく、一応ハイブリッド留学ということですよ。

スライド-39 工学院大学は防災・減災に積極的に取り組んでおります。これは、これからもしっかりとやっていきたいということもありますし、近年、実績も上がっています。たまたまこういうことをやっていた中で、3・11の大震災のときにはたくさんの帰宅困難者に入っただき、それなりにいろいろな対応をさせていただきました。また、防災・減災システムの開発とかいろいろな課題に取り組む、文科省のまとまった補助金もいただくような研究活動をしております。メンバーとしては建築の先生が多く、私も一時期端っこに加わって、事業継続計画に関する研究という課題のお手伝いをしています。建築だけではなくて、機械の先生方ですと、発電機とか、再生エネルギーの利用とか、そのようなテーマで参加されている方もいらっしゃるし、情報の先生などは被災時の通信をどうするかとか、いろいろなことで成果が出ています。そういう中で建築の先生方が中心的に頑張っているということをもっと世の中に上手にアピールすべきだと思っています。

2011年に建築学部を作ってジタバタとやっているところなのですが、当然ながら、いろいろと課題があります。そういうものを少し整理してみました。

スライド-40 受験生については、おかげさまで数、質とも向上しました。ただ、偏差値が上がっ

たはいいのですが、どうやって維持するかということが期限のない課題としてあります。それから、カリキュラムについては、一応これまでのところ趣旨がうまく生きているとは思いますが、卒論をやってもらってどうだとか、適切な評価ができるのはまだまだこれからです。ただ、先ほども申し上げたように、基本的に学生が学科を確定するのが3年になるときだというのは、まあまあうまく行ったのではないかと思います。デザインをやりたいと思って入ったもののデザインよりもっと現場が面白そうだとか、超高層で耐震性のある建物を造りたいと思ったけど、何か厳しい先生にデザインをガリガリ指導されてそちらが面白くなったとか、そういうことがありますので、1、2年の勉強を踏まえて学科を決めるというのは、総合的に良いことが多かったのではないかと思います。

スライド-41 教員については、工学部建築系の先生が当然大多数ではあるのですが、その中で、防災、インテリア、ランドスケープといった分野には、非建築系の人に来ていただきました。立ち上がったばかりですから、若い人よりは実績のある方ということで来ていただいておりますので、年齢構成的にこれからどうするかというようなことがあると言えはあります。詳しい話は省略しますが、今の建築学部の教員構成は「教員構成の充実、整備」の中の表にあるような形になっています。一見、まあまあバランスはいいように見えますが、もう少し若い先生が多いと本当はいいのです。いずれにせよ、これからの課題はいろいろあります。

スライド-42 このスライドは建築学部の今後に向けてということで、私なりにこれまで考えてきたことを書いてみたものです。

「建築学部の可能性を拓く:建築学部の教育・研究の使命の探求・確立」。建築学部という学部名称を作って、工学部の枠を超えた可能性を開くことは、必須です。実際にそういうことができるかどうかは、私は3月で辞めましたけれども、今いる教員がどういう活動ができるか、あるいは建築学部に入學した学生が、在学中にどのような勉強そのほかの活動をし、将来どう伸びるかということに掛かっています。そういうことを踏まえた建築学部の可能性というものを、これからじっくりと考えていかなければいけないということを、まず、書かせていただいております。

二つ目に書いてあるのが、「欧米型の建築学部(Art & Architecture)ではなく日本の建築学部(工学部系をコアとし、すそ野を拡大)であることの意義と可能性」です。建築系での建築学部の

創設のための議論のときに、エンジニアリングは別のところで学ぶのだという、欧米型の建築学部をイメージする方もいました。それが日本にはないので、是非創って欲しいという意見です。しかし、工学院大学の建築学部はそういう欧米型の建築学部ではなくて、周辺は広げる、すそ野も広げると言いながら、コアとなるのはやはり工学部系の建築です。つまり、ゼネコンに入って十分役に立つ、あるいはハウスメーカーでしっかり仕事ができる、そういう卒業生が多数卒業することが、建築学部を支えるはずだ、ということを確認しています。設計事務所を志す卒業生も、これまで同様多数いるはずです。そういうことがあってこそ、すそ野を広げる意味があります。すそ野しかない建築学部ではどうにもならないかと思います。

三つ目が「社会貢献の展開」です。大学の使命は、教育と研究である、と言うことが、これまでずっと長く言われてきています。それに社会貢献が加わったのです。そういうことを明言した中央教育審議会の答申が、2006年に出ております。大学の社会貢献は一に人材を輩出することではないか、研究成果を世に問うことではないかというのは、以前から言われてきていることですが、それはここで言う社会貢献ではなく研究・教育自体の一面です。ここで言う社会貢献とは、教育活動が、例えば被災時のボランティア活動と一体になる、といったことが挙げられます。従来の教育とはだいぶ違うものです。研究も、いわゆる論文を書くための研究ではなく、いろいろな形で社会に役に立つ、狭い意味の研究を超えた、社会貢献的な活動が大学にも必要であるということです。そういう意味では、いわゆる市民講座に出張するとか、夕方から公開講座をやるとか、あるいはオープンな形の研究活動とか、従来の研究・教育とは一線を画した形で、新しい分野としての社会貢献に各大学とも取り組むべきだろう、ということですが、そういうことを工学院大学建築学部はやっていかうということです。

今日の話は以上でございます。尻切れトンボみたいになって恐縮です。どうもありがとうございました。(拍手)